



依然窮地に立つ製造業

世界的な需要の減少に加え、製造および卸売セクターで長引く低迷や成長の横ばいを主な要因として、シンガポール企業全体に悲観論の高まりが感じられる。ダン・アンド・ブラッドストリート（シンガポール）の信用調査部門であるシンガポール・コマーシャル・クレジット・ビューロー（SCCB）によれば、総合景況感指数は前四半期の0.14%から2016年第1四半期は-2.93%とマイナス水準に落ち込み、数年来の最低を記録した。前年同期比では4.04ポイント減となった。

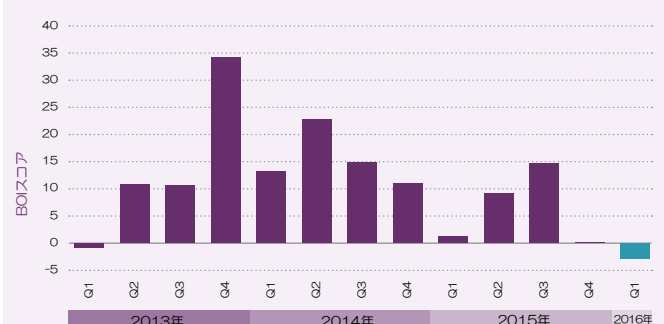
- 2016年第1四半期は、売上高が2.75ポイント減、純利益が4.92ポイント減と、ともにさらに悪化した。2016年に向けて国内企業の足取りは慎重である。調査対象企業のうち、事業拡大に向けた投資の増加を予定している企業は6%のみで、大多数は横ばいと回答した。
- 指数が上昇したのは唯一販売価格のみで、前四半期の-6.43%から今四半期は+4.93%となった。前年同期比でも0.64ポイント増と若干改善している。
- 新規受注と在庫はプラスからマイナスの水準に落ち込んだ。メーカーの新規受注は引き続き縮小傾向にあり、前四半期の-22.22%から今四半期は-56.0%と最悪を更新した。全セクターにおける新規受注も下落し、-2.11%となった。今四半期の在庫は4.25ポイント減となった。
- 従業員数は約20ポイント減と大幅に低下した。一方で調査では、38%の回答者が、2016年の最重点投資分野として従業員のスキルの向上を挙げており、機械および資本設備を挙げた回答者（37%）を若干上回った。

短期的には、年間GDPの18~20%を占める製造が引き続き足を引っ張るものと思われる。D&Bによる

2015年第4四半期の景況感指数レポートでも、製造セクターの苦境を予想した。特に輸送技術、電子機器および精密工学で生産高の減少が続いていることが影響し、製造セクターは6指標すべてが低下する最も悲観的なセクターとなっている。さらに調査では、今四半期の建設企業の見通しが悪化していることも判明している。グローバル・リスクの悪化傾向に伴い、ここ数カ月は景況感指数が停滞する可能性がある。

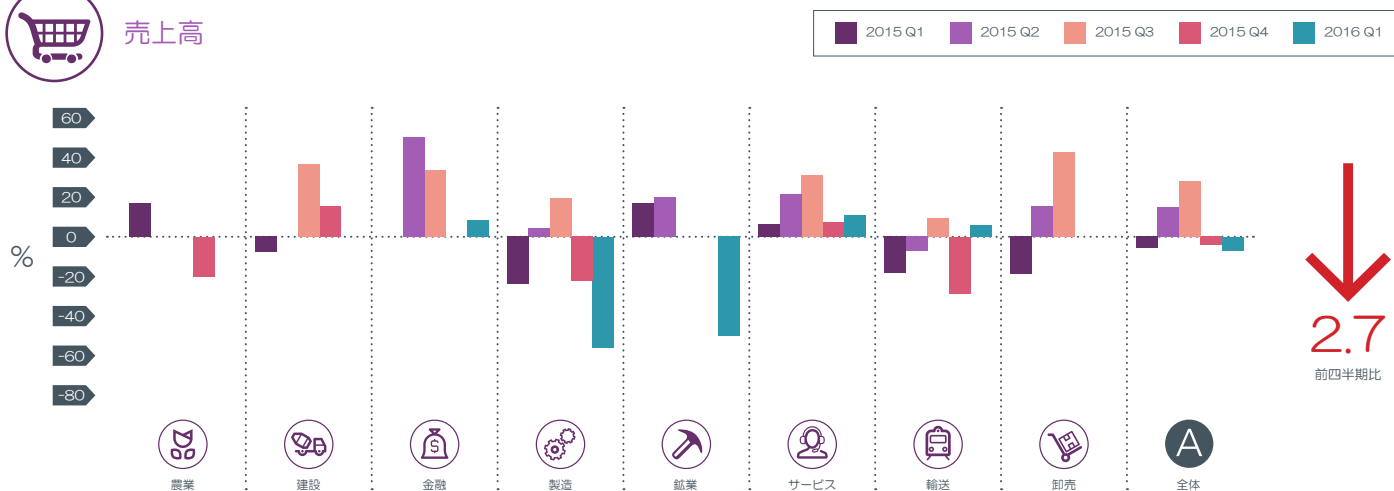
D&Bでは、シンガポールの消費者の回復力が短期的な成長を支えし、製造セクターの低迷の一部を吸収するのではないかと見ている。さらにシンガポール通貨監督庁は10月、主な政策バンドであるシンガポール・ドルの変動幅の傾斜を緩やかにした。このより緩和的な政策措置への移行により、シンガポールの輸出市場の活性化が後押しされると思われる。現在のデフレ環境を考えれば、さらなる緩和措置の可能性も残されている。シンガポールの実質GDP成長率の伸び悩みは一時的なものと考えられ、2016年の成長率は2.3%に回復すると思われる。

総合景況感指数（2013年第1四半期～2016年第1四半期）

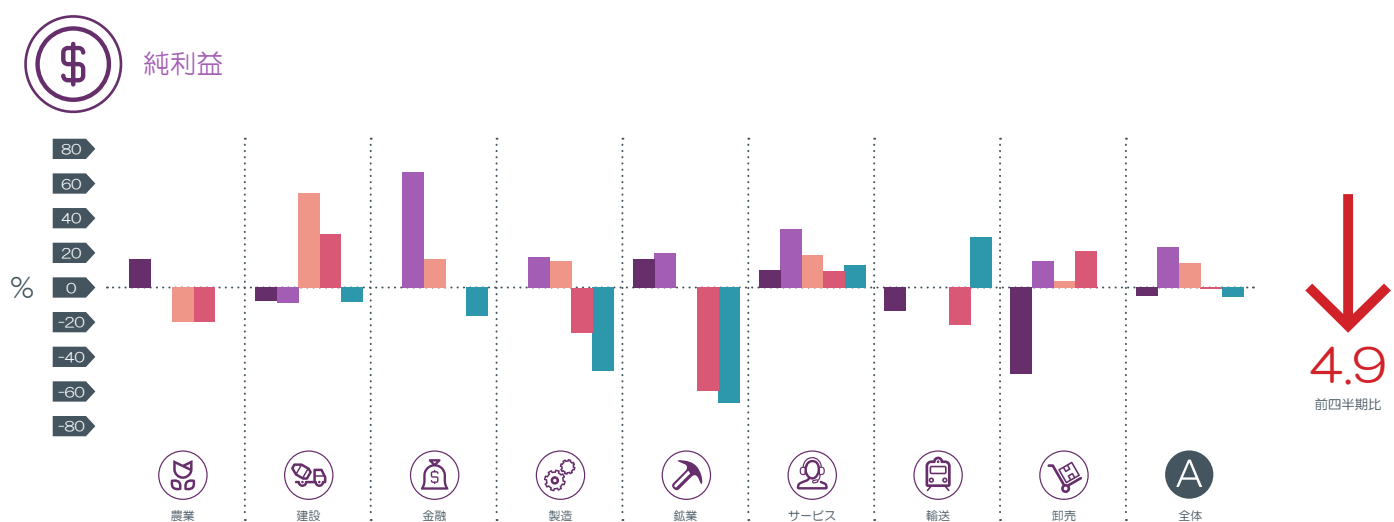




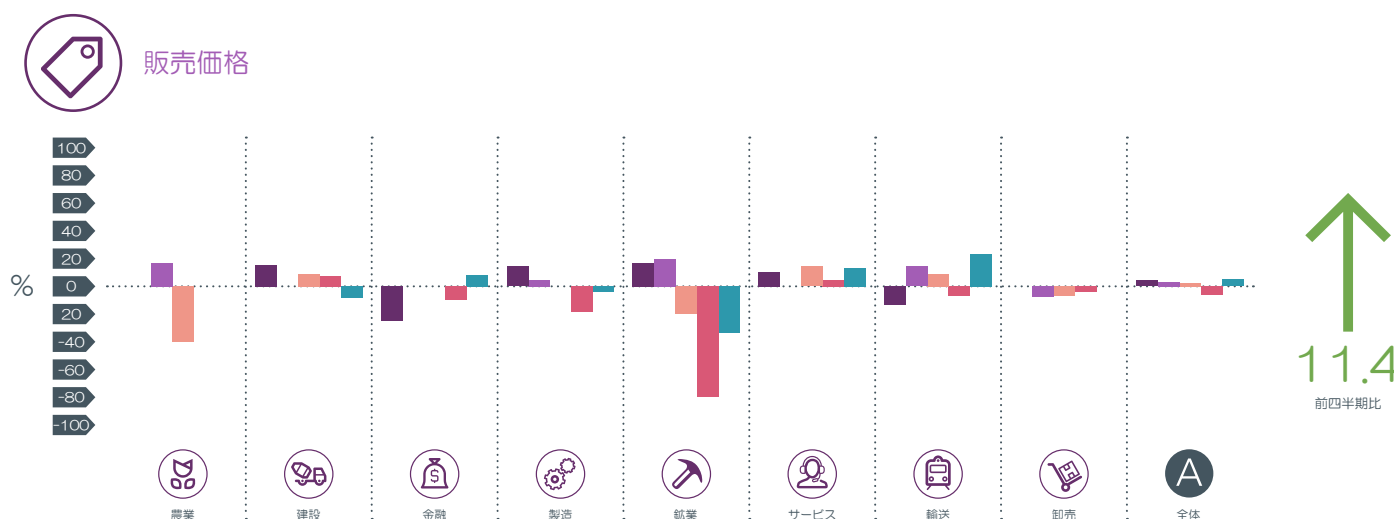
売上高



純利益

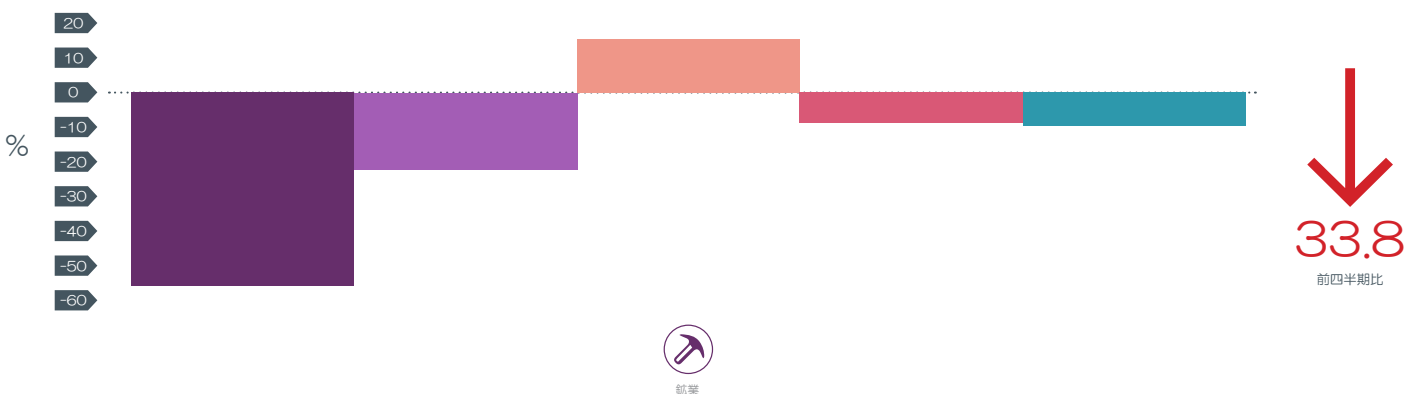


販売価格

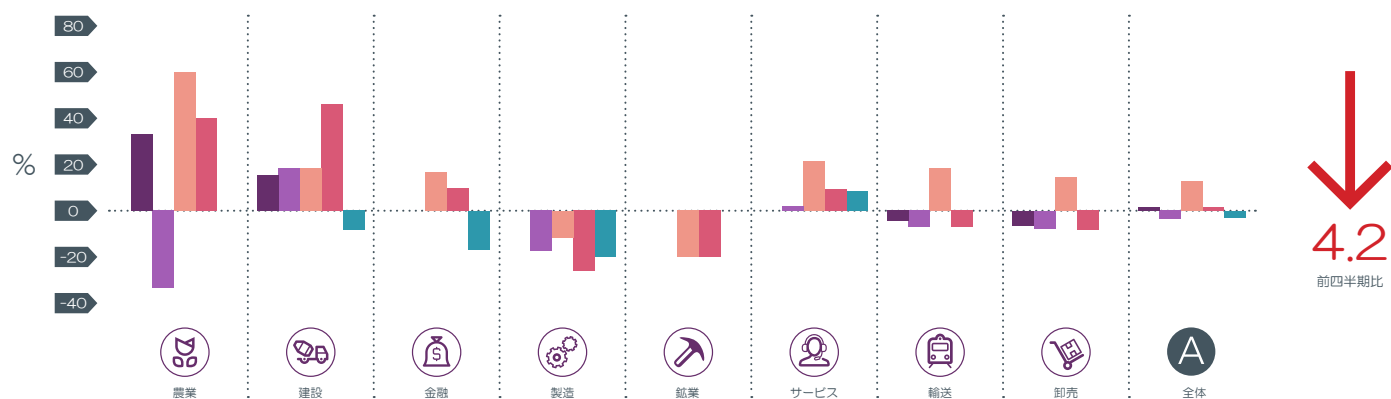




新規受注



在庫



従業員数

